



## 年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

あなたにもいつか本物の信仰が必要になる

「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」(17・6) からし種にたとえられた信仰を、今週は掘り下げてみましょう。私たちにも、あっと驚く行動を起こさせる「からし種一粒ほどの信仰」があるでしょうか。むしろ「からし種一粒ほどの信仰」を見つけて帰ることが、今週の課題だと言えます。

古い話ですが、私の父が生きていた頃、父は刺身を食べるのに、唐辛子を箸でこさいでしょう油に落として食べていました。小学生だった私に「試しにやってみるか？」と勧められて刺身を食べると、あまりの辛さに魚を口から出すほどでした。それを見て父が笑っていた、そんな記憶があります。

それから何年かして父は船で指を機械に巻かれ、障害が残ったので船を降りて牛を飼い始めました。牛は糞を食べると当然糞をします。その糞を乾かし、袋詰めにして販売します。この袋詰めを、中学生の頃から手伝わされてきました。すべての糞を処理できるわけではなく、一部は場所を決めて捨てていたのです。

その、糞を捨てる場所のそばに、唐辛子が植えられていました。畑と山を開墾して作った牛の放牧場だったので、唐辛子を植えていた場所だったのでしょう。残り物の糞を捨てるそばにあった唐辛子は、いつの間にかピーマンのように育っていました。そして何を思ったか、私はそのピーマンの大きさの唐辛子をちぎって、食べてみたのです。

唐辛子が、ピーマンになれるはずがありません。食べたなら火の出るような辛さでした。誰も見たことのない大きな唐辛子。唐辛子がピーマンのように育つことに、素直な驚きと発見を味わったのです。あっと驚く成長、誰も見たことのない巨大な実を、父が亡くなった今でも覚えています。

さて福音朗読、使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」(17・5)と願いました。私たちは腕を磨いたり技術を向上させたりという経験を皆持っていますが、使徒たちが考えていた「信仰を増してもらおう」ということも、何か経験の積み上げやより大きな信仰に取り替えてもらおうような感覚だったかも知れません。

しかしイエスの答えは、小さなからし種に示されると言います。完全にすりつぶした辛子のチューブではなく、ほんの少し種が残してある辛子のチューブをご存知でしょう。あの小さな種に、イエスの考える信仰は示されるといえるのです。

私たちはどうかすると、大きい力があれば大きいことが成し遂げられると思いがちです。けれども他方で、小さな力が、大きな事を成し遂げることも知っています。車のタイヤを破裂させるのは

タイヤを半分に切ったからではなくて釘一本が開ける小さな穴です。仰向けになっている人を押さえつけるのに大げさな道具は必要ありません。おでこを指一本で抑えるだけで、どんなに大男でも押さえつけることができるのです。「からし種一粒ほどの信仰」とはそういうことでしょう。

私はたまにピーマンを見ると、「これはひょっとしたら唐辛子なのではないか？」と思うことがあります。実際にはあり得ないことです。あり得ないことですが、私は幼い頃にそのあり得ないことを見たわけです。

イエスが言われる「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、」この「もし、あれば」と言っているのは、あなたたちの信仰が本物であればとか、あなたたちの信仰が本当に神から与えられたものであれば、そういう意味ではないでしょうか。

もし私たちに根付いた信仰が本物であれば、神から与えられたものであれば、闇の中でも光を見つけ出します。絶望の中でも希望を見つけ出します。暗闇の中で光を見つけ出す信仰は強力なライトではありません。真っ暗闇の中、手探りで生きている人生でも失うことのない小さな持ち物です。

絶望の中で希望を見つけ出す信仰は、絶望を打ち壊すショベルカーのような信仰ではありません。10年、20年と絶望を味わう中でもみずから引っかかっていた髪の毛一筋ほどのよりどころなのです。そのような小さな持ち物が、闇に光を見だし、絶望の中で希望を拾う「からし種一粒ほどの信仰」なのでしょう。

みなさんそれぞれ、信じていたものをたたき壊され、何も信じられなくなる時を味わったことがあるでしょう。何も信じられないのは確かですが、その時その人が死の淵から生きて戻ってくるのは、神が与えてくださる「からし種一粒ほどの信仰」なのです。「信仰は二の次で、まずはこの世の生活だ」そんな思い違いから抜け出した時、私たちは本物の信仰に出会うのだと思います。